

## 吹春俊隆先生のご退任にあたって ～ジャズ、村上春樹、フェルメールを愛する Publish or Perish の国際派～

社会情報学部教授 開澤栄相

吹春先生に初めてお会いしたのは、2010年の秋に模擬授業をされた時で、力みのない穏やかな口調で淡々と話されるお姿がとても印象的でした。

先生のご研究は一般均衡理論からスタートされましたが、研究態度は一貫して政治的要素を取り入れた研究（例えば、日米貿易摩擦、環境問題、ソビエト崩壊、思いやり予算、所得格差、EUなど）がテーマでした。2014年にピケティの「21世紀の資本論」が出た頃には所得分配不平等化（いわゆる格差問題）を研究され、海外での学会や相模原キャンパスの公開講座で講演をされておりました。

ロチェスター大学に4年半おられた先生は Warm Heart と Cool Head を地で行かれる国際派の経済学者であります。そのきっかけは「大学時代の英語教師 Johnson 教授である」と思い出を綴ったエッセイ集に書かれています。そこには、1960年代末から70年代初めの地方の国立大学生の心象風景が描かれており、中でも授業に出ず原書に明け暮れていた日々や数理経済学の論理的美しさに嵌ったというくだりは、かの森嶋先生を彷彿とさせるほど清々しいものです。

先生のゼミでは学生に Time を読ませていましたが、先生は「ゼミは人間教育の場だよ」とよく語っておられ、ゼミ生の吉田正尚が2015年ドラフト1位でオリックスに指名された時、「あいつは勉強の方は…」といいながらも心底嬉しそうでした。そして学生の研究発表時に先生が発せられた「エイエイオー」の掛け声は、多くの学生・教員の心の中に長く記憶されることでしょう。

そうした先生の研究室にはいつも音楽が流れていました。その音楽CDは周辺の図書館を制覇して集めたもので、私が聞いただけでも渋谷、町田、橋本、八王子、立川の図書館にまで足を運ばれたようです。ジャズ（マイルス・デイビスの大ファン）一辺倒かと思いきや、大学生の頃から PPM やサイモン & ガーファンクルに傾倒していたとのこと。毎年3月末の学位記授与式の後、卒業を祝う会までのわずかの時間、青山キャンパス近くのライブハウス S を訪ね、トランペット練習を兼ねた岩井先生と来店していたジャズメンの方々とセッションをよく聞きましたが、本当にこの上ない至福のひと時でした。

ある時、図書館報に書かれたエッセイ（村上春樹の1Q84を題材に日本を論じたもの）を拝見いたしました。海外の評者の限界を指摘されるなど、小説の読み込み方は尋常ならざるものでした。「大学生の時に哲学や倫理学に触れ経済学部から文理学部に移ろうかと思った」ということを後で知ってむべなるかなと感じ入りました。さらに、フェルメールを追いかけるなど、先生は沢山の引き出しをお持ちでした。

そうした外柔内剛のお人柄は教授会でも発揮され、内容は厳しくとも、柔らかい関西訛りが包容力に富んでいたのも、何度も私達を穏やかな議論に導いてくれました。

社会情報学部に来られる前は、神戸、広島と長らく関西にお住まいになっていたのも、初めて関東に住むということでご家族は楽しみにされていたということですが、着任から7年間、奥様とご一緒に関東（東京）を十分ご堪能されたでしょうか。今後は生まれ故郷の九州に戻られるとのことですが、晴耕雨読の穏やかな日々が続きますよう、願っております。